

Title	吉田小五郎「稿本慶応義塾幼稚舎史」および同付録「慶応義塾幼稚舎史目録」
Sub Title	Kogoro Yoshida (吉田小五郎) A history of the Keio Primary School
Author	会田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1966
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.4 (1966. 3) ,p.123(557)- 126(560)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660300-0123">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660300-0123</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 批評と紹介

「稿本慶応義塾幼稚舎史」および

同付録「慶応義塾幼稚舎史日録」

会 田 倉 吉

昭和四十年十月十日に慶応義塾の幼稚舎史が刊行された。同校創立九十周年記念事業の最後をかざるもので、「稿本慶応義塾幼稚舎史」(A5判、前付共総頁七三三ページ、図版口絵共一〇一)と、別巻付録「慶応義塾幼稚舎史日録」(A5判、総頁三七八ページ)との二冊から成り、計一千ページを優にこえる。そのうえ内容はまことに精確、一小学校の歴史としてこれだけのものはまず未曾有であつたろう。

本史は明治七年(一八七四)の創立から昭和二十年(一九四五)までの七十年にわたる幼稚舎の変遷と実績を述べ、全編を大きく九分して、序説「和田塾の背景」以下、第一章の「和田舎長の頃」から第八章「清岡主任の頃」にいたるまで、歴代の責任者(舎長または主任、幹事)の在任期間によつて章を立て、それぞれの時代の特徴をとらえながら、それらの各時代における教科のこと、教職員のこと、生徒のこと、施設のこと、授業料のことなど、くまなく探索して記載し、伝統ある幼稚舎の歩みの全貌をよく敘述しつくし、加

うるに興味深い史料や逸話の数々を章末に添えて収めてある。それも、とかく偏狭な限られたただの一学校史にのみ止まることなく、いつも慶応義塾のなかの一つの学校史であることを念頭に置きつつ、あわせてつねにわが国の教育史上における位置を考慮して、執筆されているのが注目される。

ただ、強いていえば、もともと創立九十周年記念の編纂であるべきなのが七十年史で終つてしまつている点を遺憾とするが、ひそかに聞くとところによると、昭和二十二年以降はこの書の執筆にあつた吉田小五郎氏自身が舎長であつた時代にあたるため、あえて省略されたものとのことで、これは吉田氏の謙虚な人がらをしのばせるものである。そういえば、その意味では、これだけのものを書かれないながら、ことさら書名に「稿本」の二字を冠された事実もまた同様といえよう。したがつて、調査はもちろん十分に後に及んで行きとどいてるのであつて、現に巻末の略年表では昭和三十九年五月の九十年式典や同校機関誌「仔馬」の同記念号刊行までがしるされていのみならず、執筆はあくまで執筆時現在に立つてなされているから、その限りではもちろん随所に七十年史以後の記事が見られるのである。

また、日録はまさしく史学者としての編著者の本領を示したもので、本史と同じく各舎長(主任、幹事)の時代別に、明治七年一月から昭和二十年十月にいたる間の、それこそ日々の記録をいちいち史料にもとずいてしるしている。つまり、ひとくちに付録とはいつても、むしろその実はこれがあればこそ本史が成り立つたのだといつ

てもよいくらいのもので、このような努力のうえにこそ立派な本史の完成があつたものと思われる。かつて、吉田氏が昭和十六年（一九四一）にはじめて本格的な舎史編纂を委嘱されたとき、同氏は恩師幸田成友先生に相談して、執筆は二の次とし、とにかく史料の収集と整理を担当するというでこれを引き受けられたという。そして、「史料が整備すれば舎史は八分どおり出来たものと心得て」（後記）おられたそうである。そのようにして、何年もの間、文字どおりこつこつと史料の探究、謄写、検討に専念されてきた氏の姿にはただただ敬服しないではいられない。

さらに、後記によると、「編者は執筆にあたって、当然のことながら、事実は常に史料によつて語らせるように努め、典拠を明らかにし原史料の校訂は厳密にした。」とあり、全編がその態度で貫かれている。そういうきびしさが各章節のすみずみに行き渡つていて、読むものに心からの納得と共感を覚えさせずにおかないのである。明らかに史料のないところはないとして、決していい加減に糊塗はせず、判らない点は判らないとはつきりしるす。しかも、それでいて、固苦しい感じは読者に少しも与えない、ということは、けだし一つにはさすがに随筆家としても聞こえる編著者の筆致の妙であり、一つにはやはりなんといつても史料に対する深い理解と、その消化力によるものと信ずる。手中の史料を本当に咀嚼したうえで、これを駆使しているからであろう。

筆者はさきに、編著者がいよいよ執筆にかかられるに先だつて、これまでの学校史（特に小学校史）でこれはと思うものがあつたら

知らせてほしいと、何度かたずねられたことがあつたが、吉田先生にお見せするほどのものはとても思い当らないまま、とうとうそれぎりにしてしまったことを覚えている。けれども、こうしていま完成した幼稚舎史を手にしてみて、それはそれでよかつたのだと少しみじみ感ずるものである。多年にわたつて舎史編纂にかけてこられた年期と、その間にたくわえられた夥しい史料とはおのずからに編著者の、編史上の態度なり方向なり構成なりをしつかりしたものに固定していたはずであり、とりわけ、氏の幼稚舎そのものに寄せられる絶大な愛情にはおよそ他からの介入を許さぬものがあつて、それがここにみごとな実を結ばせずにはいなくなつたからである。たとえば、なにか参考になりそうなものを一つや二つお目にかけてたとしても、それでこの舎史が多少ともかわつたものになつたらうとはとうてい考えられはしないのである。内田現舎長は序文において、「真と愛」という言葉がこの書を読んで脳裡にひらめいたといつておられるが、いかにもいいあてていて感をひとしくする次第である。ことに、第八章第七節「疎開学園」の項などは、言外に執筆者自身の体験からくる実感と、児童へのつきぬ愛情とをしのばせ、読みなながら涙をさそわれずにいながつた。

もつとも、それだからといつて、この書に瑕瑾が絶無とは必ずしもいいきれない。たとえば、本史四十五ページに「明治十一年（一八七八）中沢与吉、お米（○与吉の妹）兩人に対する木版刷の受教料の請取書にも慶応義塾幼年局と印刷されている。」とするされているのに、その史料の写真とおぼしき図版の文面や図版の説明文には

どうやら若干のくいちがいがあつて、それについての説明は別になにもないとか、あるいは和田舎長時代の教職員氏名に一名重複があるとかいう程度のことはある。校正もいまだき珍らしく四校から五校も重ねられたといわれるにもかかわらず、誤植がまだ残つていないとはいえない。

しかし、それらはいわば上手の手から洩れたしづくにすぎず、それよりも筆者は編著者のあくまで自信に満ちた執筆態度に深甚な敬意を表するものである。慶応義塾全般のことに關してはしばしば「慶応義塾百年史」によりながらも、いたずらにそれを踏襲するのではなく、かりに一例をあげるならば、義塾がわが国で最初に授業料を徴収するようにしたときについて、それを「明治二年」と明記しているところがそれで、普通これまでは「明治元年」とされてきたのであつたが、筆者もやはりどちらかといえば二年説をとる。それから、第三章の付録第三「幼稚舎出身の著名人」とか、各時代の教職員氏名一覧とかは表記されたものだけを見てはなんのこともないようなものだが、それをこれまでに仕上げる労力は並大抵ではあるまい。わけても、入社名簿や勤惰表をもとにしての生徒に關する各種の統計などはまさに史料の駆使といわずしてなんといおう。

なお、編集兼発行人の名義はもちろん慶応義塾幼稚舎であるが、実際の編集にしたがつて執筆を担当されたのは前述もしたごとく、ほかならぬ吉田小五郎氏であつて、同氏は大正十三年以来四十余年の長きにわたり同校に教員をつとめられていたばかりか、太平洋戦争後の苦難のはなはだしかつたおよそ十年間は特に舎長の要職に就

かれていたのであつた。つまり、幼稚舎教職員中の長老であるのもとより、創設以来九十年を閲する幼稚舎の歴史のほぼ半ば近くを自から体験されてきたわけで、舎史編纂にはまつたく欠かすことのできない人といわなければならぬ。それに、同氏がさきにも述べたとおり幸田成友先生門下のすぐれた史学者であることを思えば、幼稚舎がその光輝ある歴史の編纂にあたつてこの人を得たということはこの上ない幸せであつたといえよう。

かてて加えて、この編著者がこの幼稚舎史のためにささげた歳月は、しばしの断続はあつたにもせよ、同氏が幼稚舎に在職していたほとんど全期間に及び、まず就任した初年度にはやくも創立五十周年の記念刊行物「幼稚舎紀要」の編集を命じられて、その沿革を執筆されたことがあつたという。ついで、昭和十六年にはさらに本格的な舎史編纂の計画がおこつて、そのための史料の蒐集整理のことが同氏に委ねられるにいたり、爾來戦中戦後の多事のときをこえ、舎長としての繁務を果たし終えられて、同三十五年から再び舎史のことに専念され、三十九年の幼稚舎創立九十周年を期していよいよその記念事業の一としての舎史刊行が実現の運びとなつたのであつた。

対象はわが国の小学校でも随一を誇る幼稚舎であり、編著者は比べるものがない適任者、条件に欠けるところはないのである。よいものが出来ないはずは有り得まい。思えば、幼稚舎ほどの学校の校史がいままで一度も公にされなかつたのは不思議といえば不思議で、今日の刊行はいささか遅すぎた感がなくもないが、さいわいこ

こに最適の編著者を得て立派な舎史の完成したことはまことに慶賀に堪えない。編著者吉田氏におかれてもこのことにしたがわれたことは、あに労苦の思いのみでなく、きつと生涯の記念とされることであろう。それについても、許されるならば、いずれ近い機会になんとか思いを新たに入れかえ遠慮を去つて、のちのちのためにこのあとの二十年史を書きつがれることを執筆者に望んでやまない。

井戸 尻 藤森栄一編

中央公論美術出版  
昭和四〇年七月刊

鈴木 木 公 雄

我国の縄文文化は、土器・磨製石器の使用などからも知られるように世界史的な視野にあつては新石器時代の階梯に属するものといわれている。しかし乍ら新石器時代の特徴の一つとされている農耕については、今日に至るまで縄文文化中に、その存在を明確に示すべき資料が見出されておらず、従つて縄文文化は、いまだ捕獲・採集経済の段階にあるとされている。これは一般の新石器文化に比する時、やや特異な例に属するものとも考えられるのであり、従来いく人かの先学が縄文文化における農耕存否について検討を加えて来た。今日の学会においては、大勢として縄文文化にはいまだ農耕は行われておらず、その後半においては、かなり高度な採集・捕獲（狩猟・漁撈）が発達したものとする見解が支配的であるが、近年来、藤森栄一氏を中心とする人々は縄文文化中期に、すでに何らか

の形で農耕が存在したと認められるという見解を公にされ、九州地方晩期縄文文化にも大陸農耕文化との関連をたどるような遺物が存在し、弥生文化の成立に先立つて農耕の開始を示すような傾向があることが発表され、これらの見解に刺激されて一躍縄文文化中期以降における農耕の問題が脚光をあびるに至つた。縄文文化晩期における農耕の問題は、晩期という時点にのみ限定するのならば、来るべき弥生文化の先駆的な開花として捉えることも可能であり、問題はむしろ弥生文化の発生とかわり合うものが多く、縄文文化の本来的な性格に関連する場合は、或は少ないかも知れない。しかし乍ら中期縄文文化に、すでに何らかの形で農耕が行われていたかも知れないとすれば、これは縄文文化の本質にかかわる問題となり得ることが考えられる。少くとも中期縄文文化以降に何らかの農耕が開始されていたとすれば、それ以前と以後における縄文文化の評価は同様ではありえないし、その農耕がいかなる規模のものであり、弥生文化をもつて開始される本格的な水稻農耕と、どの様にかかわりあうのであるかという点に至れば、これは単なる農耕の存否の問題をこえて、我国の原始文化の歴史的な展開の方向をいかに規定していくかというヴィジョンの問題にまで発展する可能性がある。そのような意味で、藤森氏等が精力的に説かれて来た縄文文化中期農耕論の根本資料となつていた南信濃八ヶ岳南麓に分布する井戸尻をはじめとする中期縄文文化遺跡群の報告書たる本書が刊行されたことは誠によろこばしく、これを機会に本書の内容を以下簡単に紹介することは有意義と思われる。